◆八木健　選　～古賀しぐれの滑稽俳句①～

俳句を詠むことを「ひねる」とか「ひねり出す」などという。この表現はなんとなく小細工をする知恵がちらついて嫌だなと思う。しかし、明らかに読者を驚かす新鮮な見方と表現に出会うと、その軽妙に脱帽する。「この表現がひねりなんだ」と。

作者が「滑稽」を意識して作句したのではなくても、私はその巧みな表現に「滑稽」を感じる。

吾も蝶も縁より上がる夏座敷

知人宅を訪問したのである。手入れの行き届いた庭を褒めたりしていると家人から声がかかる。「おあがりなさい。玄関にまわらんでも、そこからでいいから」。気の置けない間柄だから、「それじゃあ遠慮なく」と言って靴を脱ぎ縁に足をかけた。家の中に体を入れると同時に、蝶も入ってきた。「吾と蝶」とせずに「も」を使ったところに肝心のヒネリがある。「も」によって、蝶と連れだって一緒にお邪魔したのだという楽しさ、友達感覚が生まれた。それは、詩心でもある。

学びの灯消して夜食の灯に集ふ

「消す」「集う」と動詞が二つ使われているうえに、「して」を使って経過が描かれた。俳句では、動詞を多用すると句の焦点がぼやけ、経過を書くと説明になりがちである。しかし、経過も一連の流れとして書けばかまわないし、この句の場合は、動画を観るような効果が出た。この句の何処に「ひねり」があるかと言えば「学びの灯」である。「夜食の灯」ならば誰でも思いつく。おそらく、学生寮のようなところだろう。「学びの灯」は自室に違いない。孤独の灯だ。一方の「夜食の灯」には賑やかさの喜びがある。「学びの灯」という表現を思いついたのが、結果として句の「ひねり」になった。

ふらここの兄の高さに追ひつけず

兄と並んでブランコを漕いでいる。兄は漕ぎ始めてすぐに恐ろしいほど高く

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

漕ぎ上げる。兄と並んで漕ぐ作者は、とても兄の高さに届かない。恐ろしい高さである。悔しいが兄にはかなわない。自分には無理だと思った瞬間、悔しさが尊敬に変わった。敬意という形の無いものが表現された。

不揃ひを揃へて風の秋桜

この句は風を擬人化している。風は、花の色、形、高さもばらばらなコスモスを、ひとまとめに同じように自在に揺らしてみせる。「不揃ひを揃へて」は、風の技を褒めているのである。「風の秋桜」の表現もお洒落である。

この不出来なるがもつとも案山子らし

案山子コンテストで、いくつかの案山子を見比べているのだろう。案山子の顔が美男だったり美女だったりすると案山子らしくない。着衣も新しくて生地もしっかりしていては案山子らしくない。目鼻立ちは泥臭く純朴な人相で、着衣も継ぎはぎだらけで色褪せていなければならぬ。居並ぶ案山子の中に、ひとつだけ不細工な顔で着衣も質素な一体を見つけた。こうでなくっちゃ。「不出来が一番」という逆転に滑稽がある。

太郎どろんこ次郎びしよぬれ源五郎

一読して、好奇心一杯でいたずら盛りな少年達を思い描くことができる。単語を並べただけで余分なことを言わない端的な表現というか、省略のよろしさというか、である。七七五で三段切れなのにリズム感も安定感もある。

世の端を借り蜂の巣の太りゆく

人間にとって蜂はおよそ怖ろしいものである。スズメバチでなくてもアシナガバチ程度でも怖ろしい。蜂に刺されて命を落とすこともあり、蜂に恐怖を感じるのは、人間のＤＮＡにしっかり刻み込まれている。しかし、作者は、日に日に大きくなる巣を見て、蜂の命を思うのである。世の端を借りる蜂たちは、人間に嫌われていることを知っており、そのことも作者にとっては不憫なのである。

かなかなのさらりとけふをけしにけり

かなかなの声に耳を傾けていると、だんだんと風景が薄く暗くなって、とう

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

とう日没となった。夕暮れ時の視覚的変化に、かなかなの鳴き声が幾層にも重なる。平仮名だけで書かれていて、視線が途中で引っかかることなく、さらりと読んでしまう。

寒紅も嘘も真赤でありにけり

寒紅の赤と嘘の赤の共通点は、「強烈」「激しさ」である。中途半端ではダメ。どちらもとことん赤くなければ価値がない。二つの素材がぶつかって、読者にドラマを想像させる。

青空がバスの終点山の秋

山頂ではなく、青空がバスの終点としたところが憎いねえ。しかも空は秋天でもある。バスが着いた山頂に立ち、背伸びでもしながら秋天を仰いでいる様子が目に浮かぶ。楽しい句である。この句の滑稽は無理がないことだろうか。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。